



定本與謝野日明子全集

第六卷

講談社



定本 與謝野晶子全集



第六卷 歌集六

昭和五十六年五月十日 第一刷發行

定價 三千五百圓

著者 與謝野晶子

發行者 野間惟道

發行所 株式會社 講談社

東京都文京區音羽 二一三—三

郵便番號二三 振替東京八一五〇

電話東京(〇三) 四五一三二(大代表)

組版 株式會社 熊谷印刷

印刷所 多田印刷株式會社

製本所 大製株式會社

落丁本・亂丁本はお取替えいたします
© 與謝野 光 一九八一年

0392-261162-2253 (0) (文事) Printed in Japan

凡 例

- 一、本巻の歌は単行の歌集に収録されず、改造社版『與謝野晶子全集』（昭和八、九年刊）に初めて収録されたもので、従って本巻では改造社版を底本とした。
- 一、本文、脚注ともに、漢字・かな遣いの表記は、改造社版全集に依拠した。
- 一、校訂は初出誌・紙によつて行い、参考として岩波文庫、新潮文庫に収録されたものには、その頁数を示した。
- 一、〔初〕……初出誌・紙を示す。
- 一、〔岩文〕……岩波文庫版『與謝野晶子歌集』（昭和十三年七月刊）を示す。
- 一、〔新文〕……新潮文庫版『新選與謝野晶子集』（昭和十五年六月刊）を示す。
- 一、本文中の誤植と考えられるものは※印をつけ、↓印で正しいものを示した。著者の訂正のあるものは、（ ）を付し、その掲載誌名、発表年月を示した。
- 一、例 ※(2) 氷の山 ↓ 氷の上（冬柏 昭8・2）
- 一、ただし〔初〕の歌において、明らかに誤植と思われるものは原則として正した。
- 一、〔初〕における表記の意味は次の通りである。
- 一、例 鎌倉詠草―冬柏 昭6・5（雑誌「冬柏」の昭和六年五月号に鎌倉詠草の題名で収載）
- 一、校異は脚注として付した。
- 一、例 鎌倉詠草―冬柏 昭6・5（1）遅ざくら（4）やしき跡より（1）（4）は第一句第四句を示す。ただし、校異が三句以上にわたるものは全句を記した）
- 一、〔初〕では初出誌・紙以外の出典を◎で示したものもある（本文四十五頁脚注参照）。
- 一、新聞名は左記の通り略記した。
- 一、大阪朝日新聞 ↓ 大阪朝日
- 一、横濱貿易新報 ↓ 横濱貿易
- 一、東京朝日新聞 ↓ 東京朝日
- 一、讀賣新聞 ↓ 讀賣
- 一、脚注の通し番号は底本における歌の順序を示す。

目次

深林の香

一

落葉に坐す

三

北海遊草

一六

沙中金簪

一七

綠階春雨

二五

冬柏亭集

二五

山のしづく

三六

草と月光

四三

解題
解説

逸見久美
木俣修

装幀
アド・ファイブ

深 林 の 香

身と心つねに一つに光るとて星のいみじく思はるかな

人の身はいつ許されて大空の星の神祕と程ちかくある

黒雲の寄り來と星のわななけり泥をおそるる鮎子のやうに

あかつきに民衆の星去りてのち物をおもへる帝王の星

星がもつ戀の昔はいつならん人のおもふは過ぎし幾とせ

花の名は一年草もある故にわすれず星は忘れやすかり

わが子等が寄りて火星のとりざたもせざりし冬の長かりしかな

高きより低きはてまで星にして空はまされりわれの大地に

1〔初〕星―改造 昭4・4(4)(5)星を
いみじく思ふなりわれ
〔岩文〕二二頁 〔新文〕八九頁

2〔初〕星―改造 昭4・4(5)ほど近
くある
〔岩文〕二二頁

3〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5くる雲の寄りくと星のわななけ
り泥を恐るる鮎子のやうに
〔岩文〕二二頁

4〔初〕星―改造 昭4・4あかつき
に群衆の星去りてのち物を思へる
君王の星

5〔初〕星―改造 昭4・4星が持つ
むかしの日とは何時ならん人の思
ふは過ぎし幾とせ
〔新文〕八九頁

6〔初〕星―改造 昭4・4(4)忘れず
星は
〔岩文〕二二頁 〔新文〕八九頁

7〔初〕星―改造 昭4・4(3)とり沙
汰を

8〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(5)大地の上に

鏡ほど星の光りてあぢきなし都のそとのむさし野の空

9〔初〕星―改造 昭4・4(4)都の外そと

の
〔岩文〕二二頁 〔新文〕八九頁

宵毎に湯殿の口へ七七なな八や歳のわれを送りし星に逢ふかな

10〔初〕星―改造 昭4・4(3)七八つ
の
〔岩文〕二二頁

われを見て口笛を吹く星ありぬ細き鞭もて打たまほしけれ

11〔初〕星―改造 昭4・4
〔新文〕八九頁

何よりもいみじきものはわが指の繰り出だすなる夕ぐれの星

12〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(4)繰りいだすなる

云ひがひも無く泣かしむる春の夜の悲しき星を逐へるよろひ戸

13〔初〕星―改造 昭4・4(1)(2)云ひ
がたく人泣かしむる

飛び去るも御空の星の本性ほんじやうの一つとすれば人と變らず

14〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)飛び散るも
〔岩文〕二二頁

望みなき身がするやうに大空の星を見れども執著しやくしやくぞする

15〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(5)執着しやくしやく人ぞ

銀絲ぎんしなどむすばれしごと群がれる星の下したをば渡るかりがね

16〔初〕星―改造 昭4・4
〔岩文〕二二頁 〔新文〕九〇頁

夜の道に必ずわれを見てありとある一つの星の思はる

わが枕星のかひなにあらねども冷たし窓をひらきて寝れば

山際を恐るるやうに上天にあつまりて出づ夕ぐれの星

あさましく渴ける星の匍ひ寄れる石の大路の水だまりかな

はかなめる流星ならで下界をば視かんとして倒れたる星

三時まで星とありつるところより身を起してもうら悲しけれ

流星の飛びたるのちの一瞬に身を更生の星かとぞ思ふ

しろがねの星の焰の淡雪のそぞろ散りくる夜の二月かな

17〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)夜の路

18〔初〕星―改造 昭4・4(5)開きて
寝れば
〔岩文〕二二二頁

19〔初〕星―改造 昭4・4
〔新文〕九〇頁

20〔初〕星―改造 昭4・4(3)這ひよ
れる
〔岩文〕二二二頁

21〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)尾を引ける
〔新文〕九〇頁

22〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)三時ほど(5)うら悲しかり
〔新文〕九〇頁

23〔初〕星―改造 昭4・4(2)消えた
る後の
〔岩文〕二二二頁

24〔初〕星―改造 昭4・4(4)(5)そぞ
ろに散りぬ三月にして
〔岩文〕二二二頁 〔新文〕九〇頁

伊豆の山梅の林のくら闇に星の代りて香をはなつなれ

さびしくもわれのみ見分く親うから持ちたる星と旅人の星

青き星^{かほ}彼はやうやく涙をば見守るものありとさとれる

星白し星青しなどうたがひていやはては泣く^{わたくし}私ごとに

木の枝のつららと見えて星の色悲しき冬の夜半のペランダ

わが如くものを念ずる星ありてわれさへものあぢきなきかな

あることか^た他の星は無く君と見る空にかかるは百の明星

夕明りこぶしの落花うつくしき星の^{ひねは}拔羽を踏むこちする

25〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5伊豆の山梅^{いづのやまうめ}の林^{はやし}くらやみにな
りて星こそ香を放つなれ

26〔初〕星―改造 昭4・4

〔岩文〕二二二頁

27〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5(2)彼れもやうやく(5)ありと悟れ
る

〔岩文〕二二二頁 〔新文〕九〇頁

28〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5(3)疑ひて(5)わたくしごとに

29〔初〕星―改造 昭4・4(5)夜のペ
ランダ

〔岩文〕二二二頁 〔新文〕九〇頁

30〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5(1)わが上に
〔新文〕九〇頁

31〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5あることか^たその他の星はあらず
して君と仰ぐは百の明星^{ひゃくのめいせい}

〔岩文〕二二二頁

32〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・

5(1)星明り(3)うつくし
〔新文〕九一頁

明星を目ざして青き一筋のけぶりのぼる夏の夕ぐれ

そよ風のうちに夜明けぬ雫とも云ふに足らざる星をとどめて

北斗をば求むる如く大ぞらに向きて涙す思ひあまれば

白鳥の星のありかを小き子とたづね侘びたる鶯峴あうけんの臺

星と云ふ指を見るのみ空と云ふ髪を見るのみ夜のたをやめ

いといたく物を思ひぬ近く來て星の鳴るとし思はるるまで

云ひがたき恨みのころろ人に燃え忽ちにして亂れし星座

七夕たなばたや智慧なき星の戀なれば掟てのままのかの歩みやう

33 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔4〕煙ののぼる
〔岩文〕二一二頁

34 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔5〕星を残して
〔岩文〕二一二頁

35

36 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔4〕たづねわびたる

37 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔2〕指の先のみ〔4〕髪のみ見ゆる
〔新文〕九一頁

38 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔3〕近くきて
〔岩文〕二一二頁

39 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5風おこりわれに恨みの心湧き忽ちにして亂れし星座

40 〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5〔1〕たなばたや〔5〕あの歩みやう
〔岩文〕二一二頁

いつの夜もわれは涙を樂めり星の性とも云ふばかりけれ

山腹^{さんぞく}の觀音堂と明星のむかひ合ひたるすずしきゆふべ

かずかずの星の間に隠れたる夜のまぼろしと思ひけるかな

わが立ちて鶯峴臺に見る星は全きに過ぎうら悲しけれ

吐息すれ都の上の空にあるあるがかなる若うどの星

今日見れば知らぬところに明星の移り住みたる冬の空かな

糠星といへど恥なき身をもてるもののみありぬ天上の國

星を見るところを得ずて悲しやと倚る肩の無き夜半に思へり

41〔初〕星―改造 昭4・4
〔新〕九一頁

42〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(5)すずしき夕
〔岩文〕二二三頁

43〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)數數の(3)かくれたる
〔新文〕九一頁

44〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(1)わが物見(5)悲しかりけれ
〔新文〕九一頁

45〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(4)あるが中なる若人の星
〔岩文〕二二三頁 〔新文〕九一頁

46〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5
〔岩文〕二二三頁

47〔初〕三十首詠草―アルト 昭4・
5(2)云へど恥なき
〔岩文〕二二三頁

48〔初〕星―改造 昭4・4 (2)處を得
ずて(4)倚る肩のなき

過りて病を得たり生れきていくそのことを過りてのち

投げ捨てしむくろのなかにおのれのみ拾はれしごといたはる國手

茶をば煮て國手夫妻の待ちたまふ十時に引きぬ熱おのづから

なほ夢にももの初めの心をば送る枕のなつかしきかな

思ひ出を嶋に浮べてわが涙そとに流れずみづうみとなる

霜月や戀のつもるに準^{なぞ}へて衣かさぬる夜となりしかな

また一人女王と僭^{せん}す曲ものが相馬郡におこりしごとく

いにしへの匂ひ未來の香を放つ薬かがせよわが胸せまる

49〔初〕常陸帶―冬栢 昭6・3
〔岩文〕二二三頁

50〔初〕常陸帶―冬栢 昭6・3(2)むくろの中に

51〔初〕常陸帶―冬栢 昭6・3
〔岩文〕二二三頁

52〔初〕霜の華―冬栢 昭5・12
〔岩文〕二二三頁〔新文〕九一頁

53〔初〕霜の華―冬栢 昭5・12(2)島に浮べて(4)外に流れず

54〔初〕霜の華―冬栢 昭5・12霜月よ戀の積るになぞらへて衣かさぬる夜となれるかな
〔岩文〕二二三頁〔新文〕九一頁

55〔初〕霜の華―冬栢 昭5・12(3)曲者が

56〔初〕霜の華―冬栢 昭5・12(5)わが胸迫る
〔岩文〕二二三頁〔新文〕九二頁

柳の葉かりがね型に瘦せ行きて思ひ死をば遂げんとすらん

57〔初〕霜の華―冬柏 昭5・12(2)か

りがね形に(4)おもひ死をば
〔岩文〕二一三頁〔新文〕九二頁

棚に咲く梨の花ほど白くして音の寂しきかまくらの波

(以下鎌倉姥が谷にありし頃)

58〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5(5)

鎌倉の波 詞書ナシ(59) 昭6・5(5) 詞書ナシ

われ幾日とどまることを期してこし松の屋敷に松風ぞ吹く

59〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5

ゆくりなく流れ合ひたるものながら沙に荒海布と勿告藻と抱く

60〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5
〔新文〕九二頁

散る波の薄きところも大空の月ほどしろし引潮にして

61〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5(2)

白きところも(4)月ほど遠し
〔岩文〕二一四頁

碎かれてなほどどまれる江の嶋の如し寂しき海に見る日は

62〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5(2)

(3)なほ留まれる江の島の
〔新文〕九二頁

沙の川脈をたどらば松山にいたらん戀も初めのあれば

63〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5(4)

至らん戀も
〔岩文〕二一四頁〔新文〕九二頁

哀れなり千尋の波をくぐり出で濱豌豆は咲けるならねど

64〔初〕鎌倉詠草―冬柏 昭6・5

〔岩文〕二一四頁〔新文〕九二頁

大崩れ逗子の岬も知りがたし霞の裾につづくしらなみ

65 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5 (5)
つつくしら波

白波の突きぞ出でくる戦ひを忘れぬ海は苦しからまし

66 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5 (2)
突きぞ出で来る

腰越へ向ふくるまを見送りて寂し話を海人の繼げども

67 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5 (2)
向ふ車を(4)さびし話を
[新文]九二頁

赤き家濱木櫛の蠟塗れる葉のしげみよりやや高きかな

68 ※(2)濱木櫛—濱木櫛 昭6・5 (4)
[初]鎌倉詠草—冬柏
葉の繁みより

腰越の人濱に來て春の日に藁塚ばかり積めるなのりそ

69 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5
[岩文]二一四頁

雨過ぎぬ紫檀の卓に沙山の花をうつして見る窓のそと

70 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5 (4)
花を移して
[新文]九三頁

煙ともうすれはてずて夕ぐれに物も云ふべくなりし山かな

71 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5 (3)
夕暮に

ベランダに説書生などある如く枕も動く海のおとなひ

72 [初]鎌倉詠草—冬柏 昭6・5
[新文]九三頁